

私は日本国家の一員か——日本国憲法理解度チエツクより

武田 婦美

平成二五年の初頭から、面白い本に出会った。しかし、辞書を片手に、時々メモを取りながら読み進まねばならない、というやつかいな本でもあった。そんなにも手間のかかる、しかも楽しい書籍にお目にかかることは滅多にない。たいていは難解すぎてちんぷんかんぷんか、改行が多くて内容もスカスカ（失礼！）かで、どちらも適当に読み飛ばすのが通常なのだが、この本はそうはいかなかった。

その本とは、堀田善衛（ほった、よしえ、と読む。ホリタ、ゼンエイなどではないので、念のため）氏の『方丈記私論』のことである。

堀田氏は東京大空襲の「昭和天皇の焼け跡視察」を目撃した、おそらく唯一の文学者なのではないだろうか。『方丈記私論』中の「羽なければ、空をも飛ぶべからず」の章で、こう記述している。

一九四五年三月一日の朝早く、まだ暗いうちに私は洗足のK君の家を出て、電車のあると

ころは電車に乗り、なくなれば歩いて深川をめざして行った。三月一日は彼岸の入りであった。とりわけて仏教徒であるなどと思ひもしない私であったが、彼岸の入り、くらしいの心得はあった。深川に知り合いの女が一人いたからであった。あの激甚な空襲をへて、生きている見込みはまずなかった。本所深川は全滅ということとは当時としてもすでに聞こえて来ていたことであり、特に、隅田川や木場の運河系などが近くにあり、猛火に追われて水に入った人のほらんどが助からなかった、ということもまた口伝えに伝えられていたからである。（中略）

女は、深川富岡町の、富岡不動尊と富岡八幡宮との、ちょうど中間あたりに住んでいたものであったが、そこらあたりには該当する筈のところには、ほとんどなにもなかった。（中略）

九時すぎかと思われる頃に、おどろいたことに自動車、ほとんどが外車である乗用車の列が永代橋の方面からあらわれ、なかに小豆色の自動車が目まじっていた。それは焼け跡とは、まっ

たく、なんとも言えずなじまない光景であつて、現実とはとても信じ難いものであった。（中略）
小豆色の、ぴかぴかと、上気な朝日の光を浴びて光る車のなから、軍服に磨きたてられた長靴をはいた天皇が下りて来た。大きな勲章までつけていた。私が憲兵の眼をよけていた、なにかの工場跡であつたらしいコンクリート塀あたりから、二百メートルはなかつたであろうと思われる距離。私は瞬間に、身体が凍るような思いがした。

私は堀田氏のこの文章を読んだ時、すぐに描写した光景を思い描くことができた。「東京大空襲」関係の写真集の中には、この記述通りの写真が大抵一枚は入っているからだ。天皇が侍従たちを従えて、廃墟と化した下町を視察する写真。または神社境内で関係者から被害状況の説明を聴いている写真。しかし堀田氏は考え込んでしまう。

信じられない、信じられない。

彼はこう呟きながら、頭をかかえてしまった。それは、全滅した深川の焼け跡を見たことやら、知り合いの女の消息のことやら、この戦争の最高責任者を、何の予告もなく突然に、目のあたりに見たことやらではない。いや、それもあつただろうが、何よりも考えさせられたのは、その最高責任者に土下座して、申し訳ありません、申し訳ありません、と涙を流し、我とわが身の非力を詫げる被災者たちの姿だった。

堀田氏は当時二七歳、この後に臨時召集で中国に出征することになるのだが、天皇に詫げる民衆の姿は彼の脳裏に強い衝撃をあたえた。驚くことに、彼の見た風景は僅か四日後の「ニュース映画」(日本ニュース二四八号 昭和二〇年三月二二日)で、「天皇陛下戦災地御巡幸」と題して上映の運びとなっている。字幕の文字を拾って書き表すと、次のようになる。

「かしこくも天皇陛下におかされましたは三月一八日に聖駕を進めさせたまひ、敵機夜間猛爆による災害の模様をひたしく(親しく?久しく?)見そなわれました。」

「陛下におかされましたは、ご順路を深川方面に向かわせたまひ、今だ(ママ)被害生々しき富岡八幡神社境内にお立ちあそばされ、大達内務大臣より被害地のご説明をつぶさにご聴取あそばされました。」

「敵の暴虐にうちさいなまれた数多くの民草

救済の状況、工場の被害状況に寄せさせたまひし大御心の程を拝し奉り、われら一億等しく号令、アメリカ撃滅の決意をいよいよ固め、広大無辺の御仁慈にゆえ奉らんことを付すものであります。」

東京大空襲の一月前、ちょうど欧州ではドイツの古都ドレスデンが英米機の猛爆撃に襲われていた、二月一四日のことである。日本では宮中において、天皇が七名の重臣に戦局のゆくえを聴取していた。この時、重臣の中では元首相の近衛文麿ただ一人が、早期の戦争終結を訴えている。これは近衛の上奏文として残っているが、対して天皇はこう答えたという。

「もう一度、戦果を挙げてからでないと中々話は難しいと思う」(『早乙女勝元著』東京大空襲より)。

つまり、天皇の回答次第では、この時点で戦争終結もあり得たのである。だが、天皇をはじめ国家指導者たちはそうはしなかった。「もう一度、戦果を挙げてから」という理由から。そして一か月後の三月一八日、天皇は御自分の判断がもたらした結果をつぶさに「見そなわれた」のである。彼はこの惨状を見て、どのように感じたのだろうか。神ならぬ人間ならば、これこそ最高責任者の責任であり、他に誰に責任があるのかと思うところである。しかるに災禍を被った民衆の方が謝罪し、かつマスコミもその哀

れな民衆に対して、ミカドの「広大無辺の御仁慈」に奮起せよという。これは一体どういうことなのか。全くもって、堀田氏ならずとも「信じられない」の一言である。もつとも、この種の「信じられない」ことは、現在でもいたるところに見られる現象ではあるのだが。

弥生三月の半ば、私は「科学者九条の会・岡山」の創立七周年記念の講演会に参加した。講師は当岡山・十五年資料センター代表の小畑隆資氏である。講演に先立ち、「岡山空襲の記録」の映画が上映された。

ルメイ司令官率いるアメリカ軍の爆撃計画によると、東京大空襲に続く中小都市爆撃では、岡山市は全国一八〇都市のうちの三一番目だった。彼らの計画通り、岡山市は昭和二〇年六月二九日の未明、八三分間に及ぶ爆撃投下によって、市街地の六三%が焼失し、一七〇〇人余りが死亡したとされる。あれから六十数年の歳月が流れ、当時少年少女だった三人の老人たちが語り部として戦争の悲惨さを交々に語っていたが、皆さんの最後の結びは、いつもの決まり文句、「戦争は絶対によつてはいけない」「戦争は二度とゴメンだ」というものだった。

さて本命の小畑氏の講演は、「日本国憲法理解度チェック」と称して、こんなクイズ形式の質問からはじまった。

あなたは「日本国家」の一員ですか？

答えは「はい」か「いいえ」のみ。

さあ、私はどう答えるか。「はい」か、それとも「いいえ」か。「どちらとも言えない」は不可である。これは日本国憲法理解度チェックとしては中々面白い質問である、と誤魔化してはいけない。残念ながら私には即答出来なかった。どうなのだろうか、私は確かに日本国の一員ではあるが、国家の一員なのだろうか。いや、まさか国家の一員? :ではないだろう、などと逡巡していた。つまり、国家と国民の違いが未だに曖昧だったことを白状しなければならぬ。

しかし考えてみると、戦争に関しても、国家には国家の記憶があり、それとは別に国民には前線兵士たちの記憶、銃後の人々の記憶がある。(この『岡山の記憶』は後者の「国民の記憶」を丁寧に検証してきた年報といえるだろう)。

国家の記憶と国民の記憶、それは本質的に一致しない、全く別物の記憶である。

国家とは「支配機構である政府」(戦時下では天皇を含む)を意味するのである。政治学者小畑隆資氏は『岡山の記憶』の映画について、こう語った。

「岡山の空襲時は帝国憲法の下にあり、国民がヒドイ目に会っていることはよくわかるが、当時の自分の立ち位置がどこにあったのか忘れてはいけない。戦争は政府、つまり国家によって行われる。広島原爆の『過ちは繰り返しません』の過ちとは誰がやったものか、謝罪すべ

き者は誰か、戦争の主体は誰かを考えなければいけない。それは当時の帝国憲法下では天皇と政府、そして軍隊である」と。

戦争責任者に向って、国民は謝罪などすべきではない。謝罪すべきは戦争責任者である。

また、「戦争はすべきではない」「戦争は二度とゴメンだ」というコメントは戦争を引き起こした責任者がいふべき言葉であり、「繰り返し返さない」と誓うのも同じく、その責任者なのである。

私達国民には戦争責任はない、基本的には。国家と国民の概念が曖昧だから、堀田氏が目撃したような「信じられない」現象が起きてしまう。ちなみに、「日本国憲法」は国民を規制する法律ではない。これは全く逆に、国民の側から国家を規律する法規範である。

小畑先生の講演を聴いた数日後に、父武田清が亡くなった。享年九五歳。天寿を全うしたと言っているほどの高齢である。死因は心筋梗塞。

父自身としてもこんなに長生きするとは思ってもよらなかったはずだ。普通なら二六歳を二期として、敵の砲弾に斃れていても不思議ではなかった。だからなのか、晩年になってから父は頻りに「わしの戦争体験を手記にまとめてくれんか」と言うようになった。自分の人生を振り返って、何かを残したくなったのだろう。「判らんことは訊いてくれ」と言うのだが、「戦争」が

苦手な私には何を訊いたらいいのかが判らない。

つまり私の力量ではとても出来ない相談だった。しかしその後、戦友の手記や父の書き散らしたメモ、軍歴などを繋ぎ合せて、『岡山の記憶』(第一三号・二〇一一年)にエッセイとして記載させてもらうことが出来た。決して満足いくものではないにせよ、これが今のところ、私の出来る精一杯のことだったと思っている。

葬儀の通夜の席で、特攻隊だったという父親を持つ従姉が言った。

「うちのお父さんは特攻隊時代の話は絶対にしなかった。けど、あのまま特攻隊で出撃したら、今の私はいなかったはずよ」。

私はその話にならず衝撃を受けた。どうして叔父は何も語らなかったのだろうか。そしてどんな思いで自身の記憶をしまい込んだまま逝ったのだろうか。

我が武田家では長男(終戦時三三才)は工兵、次男(二九才)は歩兵、三男(父、二七才)は砲兵、四男(二三才)と五男(二〇才)が共に特攻隊と、一家五人の男が国策によって戦争に参加した。そして、五人全員が復員した。これは奇跡的なことかもしれない。

映画『プライベート・ライアン』(ステイヴン・スピルバーグ監督)では、本国で待つ母親に四人兄弟全員の死亡通知を届けるのは酷だと判断した軍上層部によって、末弟ジェームス・ライアン一等兵を救出する作戦が立てられる。が、これはあくまで軍の宣伝効果を狙ったもの

で、決してライアン夫人に同情したための作戦ではない。これを見ると、連合国側でも出兵した一家の男全員が戦死する例もあったのだろう。もちろん日本でも事情は同じことである。

映画はノルマンディ上陸作戦のオマハ・ビーチでの激しい戦闘が延々と映し出される。トーチカに隠れたドイツ砲兵が次々に斃れて行く様子は、同じように砲兵として南の島を準備していた父達の姿と重なって映った。あの状況下で、もしも父が実際に敵と戦っていたとすれば、従姉の言葉と同様、私だって今の私は存在していなかったはずである。

そういえば、特攻隊の一員だった叔父たちは、戦争映画を決して観なかったそうだ。父はその反対に、私達家族を連れて『ビルマの堅琴』や『私は貝になりたい』などの戦争映画を観に行ったものである。その時の父の気持ちはどうだったか、今思えば感想を訊いておくのだった。

あれは何時だったか、父が特養の施設で体調を崩して、日赤病院に入院した頃のことである。見舞いに行くと、ちょうど昼食を済ませたばかりで、枕元のテレビでは朝の連続ドラマ『カーネーション』が放映されていた。と、なにげに画面を眺めていた父が突然こんなことをしゃべりだした。

「部隊に高橋ちゆう兵隊がおつてのう…」。
テレビではお下げ髪の女学生が「ワタシの良

い人が…」と話している場面。どうやらその女学生の恋人が出征することになったらしい。「わしの部下の、高橋ちゆう新兵が突然おらんようになって、兵舎中捜してのう…」。

高橋二等兵は故郷に「良い人」を残して、ソ連との国境沿いにある砲兵隊に入隊していた。しかし、来る日も来る日も続く、苛酷な訓練の軍隊生活が嫌になったらしい。敷地内の兵舎に隠れて、秘かに逃亡を図った(?)という。

が結局彼は捕まってしまう、軍法会議にかけられて重営倉入り…というところを、隊の上層部が揉み消してしまった。その後、彼は部隊屈指の優秀な兵士となり、軍用で帰郷した折には、その「良い人」と仮祝言を挙げてきたと。

…ふーん、と私は父の顔を眺めた。もう七十年も昔の話である。軍律厳しき軍隊で、ほんまにあつた話かいな、と半信半疑ではあつた。テレビのちよつとした台詞に反応して、封印していた記憶の引出しが開いたのかも知れない。

それよりも、私は父に訊きたいことがあつた。「父よ、あなたは慰安所に行ったことがあるか」ということである。

私は中学生の頃から「慰安所」という言葉を知っていた。それは室生犀星の自伝的小説『杏子』で、見合いの相手が軍隊時代に慰安所に通っていたことが発覚し、破談になる話を読んでいたからだ。その時私は父に尋ねたものだった。「慰安所って、なにをする所?」と。今思え

ば、ずいぶん率直な質問である。が、それに対して、父は丁寧かつ簡潔に答えてくれた。

思春期の私がすんなりと納得したのだから、父の解説はそれなりに上手かつたのだろう。(残念ながら、その説明の自身は忘れた)。しかし、その時は父自身の「慰安所」体験の有無を訊き忘れていた。肝心なところである。

私の不躰な問いに対して、父は遠くを見るように、記憶を手繰っているようだったが、すぐに言った。「いや、わしは行かんかった」。

どうして行かなかったのか、と訊くと、またもや昔の記憶を探るような目付きで言った。

「同じ部隊の中で働くには、真面目でなければいかん。そんな所へ出入りしとつたら不良兵士じゃいうて、忽ち何処かに飛ばされる」。

ふーん、そんなもんかな。すると、父が冗談めかして片目をつぶってみせた。

「おなごは弱いもんじゃから、大切にせやいかん。それにわしや、母さん一筋じゃからの」。私は思わず噴き出してしまった。ここで父のお惚気を聞かされることにならうとは。

結局、本当のところはわからなかった。だが常々「靖国に祀られるのはゴメンだ」と言っていたのを見ると、父は死後まで国家に統制されることが嫌だったのだろう。

私は日本国家の一員ですか。「いいえ」が正解である。

(たけだ ふみ)